

■ これまでの工事の経過

正倉を工事中の風雨から守り、作業の足場となる「素屋根」の建設が平成23年10月から始まり、基礎コンクリートの打設、鉄骨の建て方を経て、翌24年2月下旬に完成しました。

その後正倉本体の整備工事が開始され、正倉内にあった唐櫃の移納や陳列棚(ガラスケース)の解体作業を行い、5月から6月にかけて瓦をおろしました。その後、各種調査を行い、10月から補強工事の敷桁補強材取付作業、12月から小屋組補強金物取付作業が始まりました。

現在は、補強工事が概ね完了し、補足瓦の製作と土居葺の修繕を行っており、屋根本瓦葺替の準備を進めています。

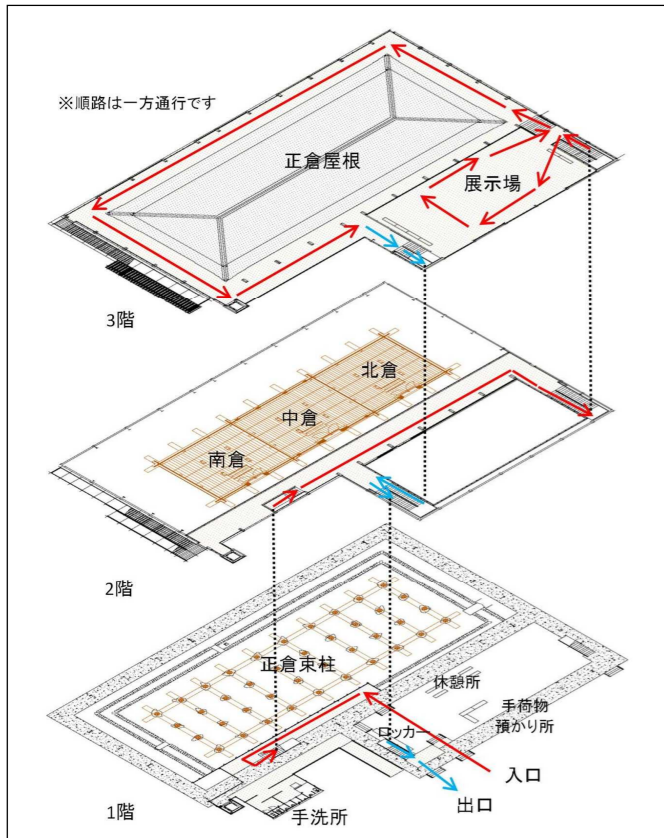
<これまでの工事の様子等は宮内庁 HP でもご覧いただけます。>

<http://www.kunaicho.go.jp/event/shososeibi/>

工程表

平成23年	10月	素屋根建設開始(～24年2月下旬まで)
平成24年	3月	第1回現場公開
	4月	正倉本体の工事開始 屋根工事 瓦撤去、選別・清掃、土居葺一部撤去 補足瓦製作・検討
	9月	第2回現場公開 小屋組構造補強工事(～25年4月頃まで) 敷桁受材取付、小屋組補強金物取付
平成25年	12月	補足瓦製作開始
	1月	屋根工事 土居葺復旧
	3月	第3回現場公開
平成26年	6月	屋根工事 瓦葺き
	1月	内部復旧 正倉本体の工事終了
平成26年	4月	素屋根解体、周辺復旧
	11月	正倉外構公開再開(予定)

案内図



■ 工事概要

屋根 瓦は全て丁寧におろし、目視及び打音検査により再用・不再用の選別を行います。

補足瓦の形状は天平期の瓦に倣い製作します。屋根瓦の葺き方は、再用古瓦を使用する屋根の場合は、湿式工法(土葺:土を敷く)、新しく製作した補足瓦のみ場合は、乾式工法(空葺:土を敷かない)で葺く計画です(瓦の葺替 約35,400枚)。

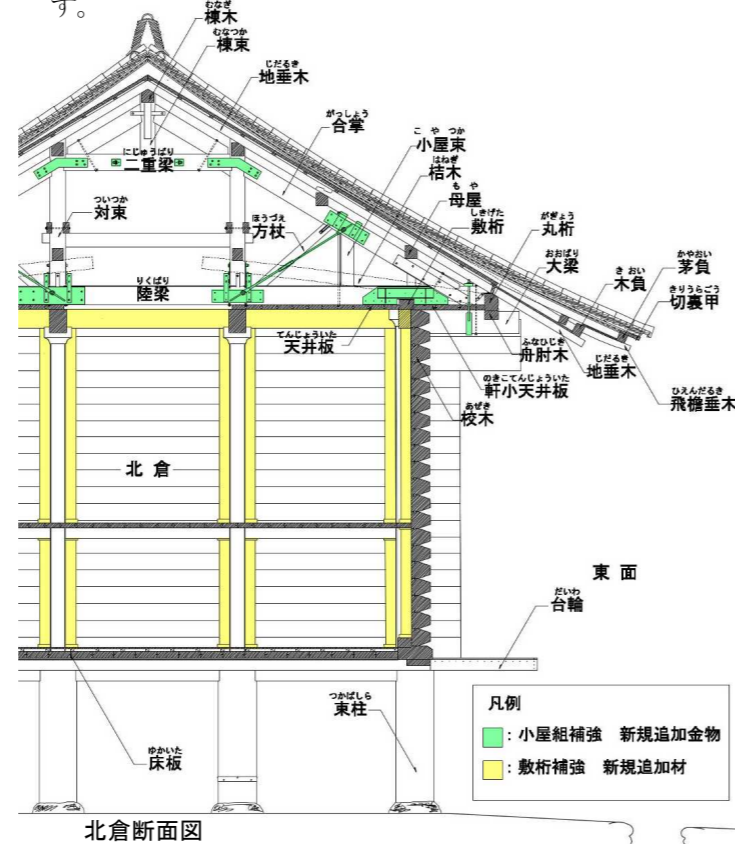
小屋組 屋根先端の垂れ下がりが懸念されていたので、丸桁が現状以上に垂下しないように、陸梁を鋼材で補強(下図、緑色部分)し大梁を吊り上げます。また、この原理によって丸桁を支えている桔木は、支点となっている敷桁を木材で補強(下図、黄色部分)することにより、支点の強度が増され、桔木の効果が高められます。これにより、丸桁の垂下を抑えます。

校木組 校木組に隙間が生じている部分は、埋木を施します。

※工事内容は調査により変更の可能性があります

【正倉の大きさ:間口約33m、奥行約9.4m、床下約2.7m、総高約14m】

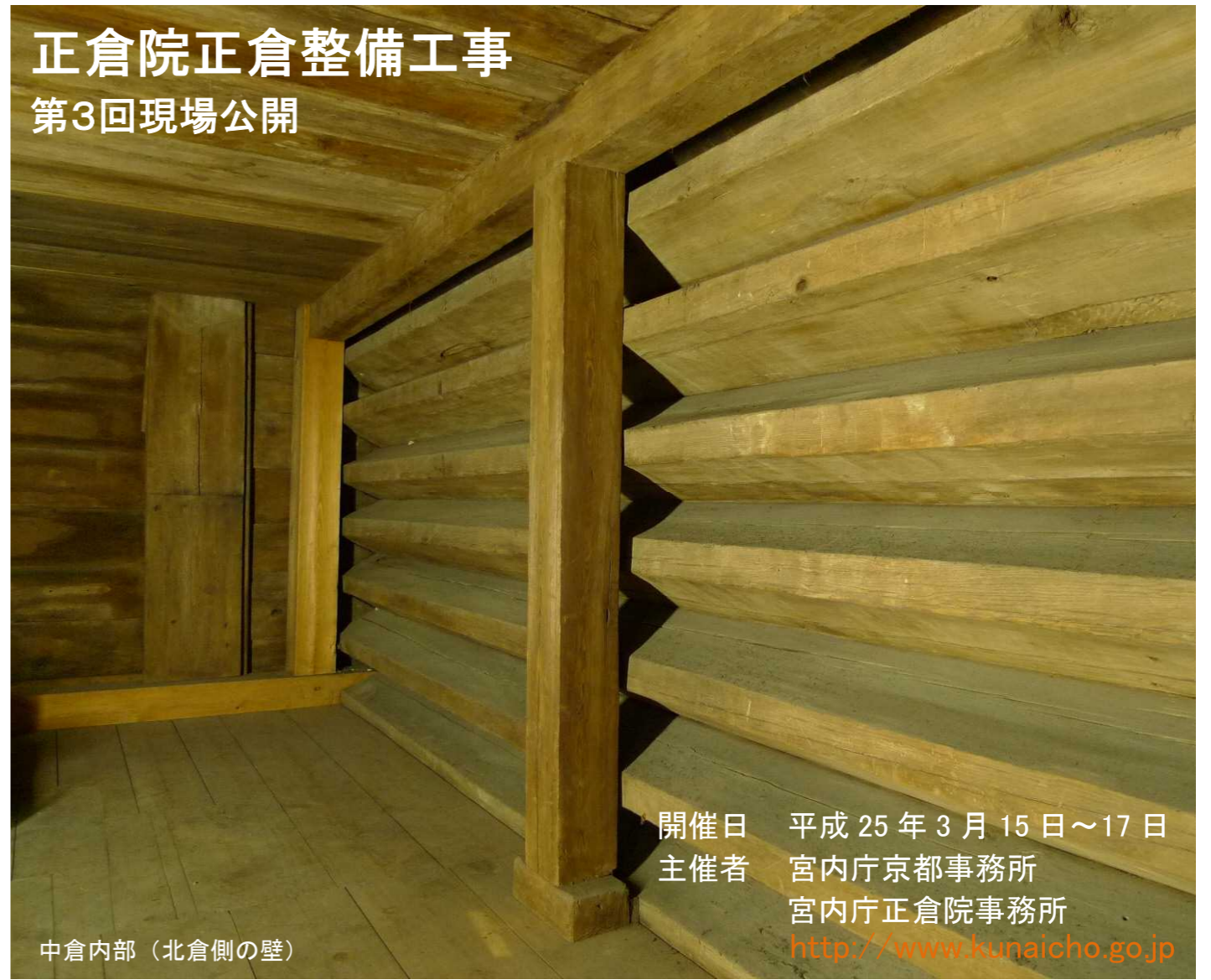
素屋根 正倉を保護するために素屋根で全体を覆っています。併せて一般の見学者の通路としても供用可能な作業デッキを設けています。鉄骨構造で鉄骨の使用重量は約360トン。大きさは約35m×約48m、高さ約19mです。



守っていただきたいこと

- **触らないで** 正倉に触れるのはご遠慮ください。
- **写真撮影** 建造物や展示品は撮影できます。ただし三脚の使用はご遠慮ください。
- **飲食・喫煙** 敷地内での飲食・喫煙はご遠慮ください。

正倉院正倉整備工事 第3回現場公開



開催日 平成25年3月15日～17日
主催者 宮内庁京都事務所
宮内庁正倉院事務所
<http://www.kunaicho.go.jp>

■ 正倉とは

正倉院正倉は、奈良時代創建の東大寺の倉庫のうちの一つであり、北倉、中倉、南倉の三倉が集合する一棟三倉形式の建造物です。創建年代を直接示す記録はありませんが、ほぼ天平勝宝8歳(756)頃には成立していたと考えられます。天平勝宝8歳は聖武天皇が崩御された年で、その七七忌にあたる6月21日に光明皇后が聖武天皇のゆかりの品々を東大寺大仏に献納し、正倉院宝物の始まりとなりました。

北倉は聖武天皇御遺愛品が納まり、当初から開扉に勅許を要する倉、すなわち勅封倉でした。また、中倉も平安時代中頃までには勅封倉になっています。南倉のみは長らく僧綱(のち東大寺三綱)が管理する倉、すなわち綱封倉でしたが、明治8年(1875)に正倉および正倉院宝物が政府の管理下に置かれるに至り、三倉とも勅封倉となりました。

戦後、新しく近代的な宝庫が完成したことをうけて、正倉にあった宝物は、昭和35年(1960)までに、一部の唐櫃を除いて全て取り出されました。現在は、空調設備のある西宝庫(昭和37年竣工)、東宝庫(昭和28年竣工)が宝物の収納・保存の役割を担っています。その後、平成9年(1997)には国宝に指定され、さらに翌年には「古都奈良の文化財」として世界遺産に登録されています。



工事前外観



敷桁補強工事前の北倉内部

小屋組の補強

■ 正倉の軒先瓦(のきさきがわら)について

屋根瓦の中で、軒先には装飾のある瓦が並んでいます。これを軒丸瓦・軒平瓦と呼びますが、その文様などには各時代の瓦の特徴がよくあらわれています。

正倉に実際に使われていた軒丸瓦は全部で382本、軒平瓦は378枚あり、外見的特徴によって、いずれも10種類以上に分類できました。瓦の裏側に年を示す刻印などが見つければ、製作時期はすぐわかりますが、文様や形などの特徴からも年代を推定することができます。

軒先の瓦には、創建当初のものは残らず、最も古いものは鎌倉時代のものでした。各時代の代表例が右の写真です。

鎌倉時代の瓦は、他の時代に比べるとひとまわり小さく、軒平瓦の幅を見ると1割程度小さくなっています。表面の仕上げについては、軒平瓦表側には布目、裏側には「東大寺」の文字銘が入った痕跡が残っています。

室町時代、文様は鎌倉時代のものとよく似ていますが、軒平瓦表面には布目は無く、なめらかに仕上げられています。

江戸時代では、**慶長期**に軒丸瓦にも「東大寺」の文字銘が入りました。これ以降、軒丸瓦・軒平瓦共に表面はなめらかに

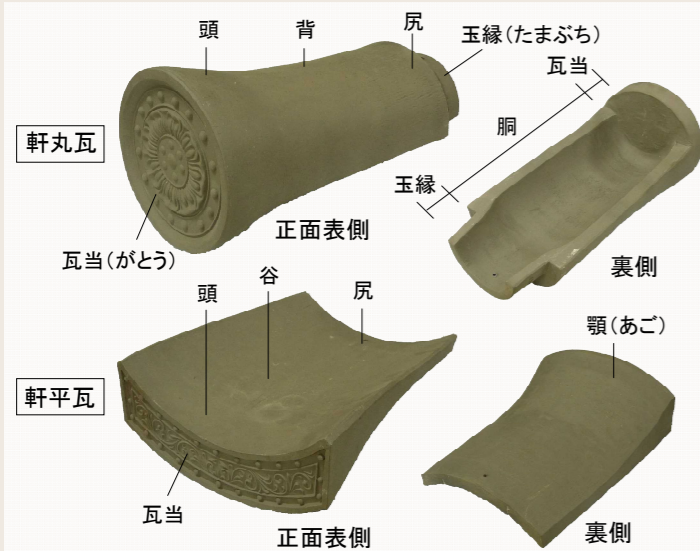
仕上げられています。**元禄期**の軒平瓦の文様は鎌倉時代の軒平瓦を参考に制作したと推測され、文字銘の意匠は軒丸瓦にも転用されています。**天保期**は軒丸瓦・軒平瓦共に「東大寺正倉院」という文字銘が入っています。

明治時代に入ると、文様の文字銘は天保の意匠を引き継ぎながらも「正倉院」という文字のみとなります。この時代には、正倉の管理は東大寺から政府へ移っていました。

大正時代は正倉創建当時の瓦を復元しようとして、奈良帝室博物館所蔵の古瓦を参考に文様を決めた、と宮内省工事記録にあります。瓦の表面には、正倉創建頃の天平時代の瓦のように、布目や縄目が施されていますが、軒丸瓦の表側の布目は、今日の古代瓦製作技法の研究に基づけば、本来は縄目であると考えられます。

過去の修理のたびに補足された瓦は、正倉の歴史の積み重なりを目に見えるかたちで示すものです。**今回**の修理工事においても正倉創建当時の瓦の復元を試み、周辺で発掘された天平時代の軒先瓦の文様を参考に新しい瓦を製作しています。

■ 今回工事の補足瓦の製作について ■

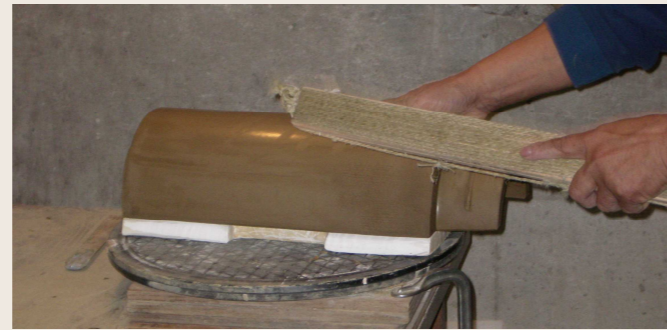


写真：今回工事の補足瓦

今回工事の補足瓦は、天平時代の瓦を参考にしています。丸瓦・平瓦の成形にはプレス機を使用し、後から縄目や布目を施します。軒丸瓦・軒平瓦の成形は瓦当を付けるなどひとつひとつ手作業です。

天平時代の瓦の特徴や、古代の瓦の製作方法については、第2回現場公開のパンフレットを参照してください。
宮内庁HPで過去の現場公開時のパンフレットがダウンロードできます。
<http://www.kunaicho.go.jp/event/genbakokai/genbakokai.html>

写真 上:プレス機で粘土瓦を成形。中:縄を巻いた叩き板で表面に縄目を施文。下:文様の彫られた笥(はん)と呼ばれる型で瓦当部分を作り、平瓦を付けて軒平瓦を成形。



鎌倉時代



室町時代



江戸時代
(慶長)



江戸時代
(元禄)



江戸時代
(天保)



明治時代



大正時代



今回工事

